

〈汪国真現象〉について：中国1990年代初頭の文学現象の一考察

掘野, このみ
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494484>

出版情報：比較社会文化研究. 7, pp.47-56, 2000-03. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

〈汪国真現象〉について

— 中国1990年代初頭の文学現象の一考察 —

堀野 このみ

はじめに

汪国真。⁽¹⁾1990年代初頭、「中国詩壇にセンセーションを巻き起こしたプリンス」⁽²⁾と称される一人の青年詩人が突如として現れた。手書きで広がり始めた名もなき一詩人の作品は若年層の熱狂的支持を受け、やがて中国全土に社会現象を引き起こした。これは76年以降の新時期文学において他に類を見ない例である。しかし市場経済導入による文学の商品化の波に乗ったプリンスが、その体制下で過去の詩人となるまでにその時間は要らなかつた。その意味で汪国真は時代を鮮やかに駆け抜け消えていった彗星の如き詩人であった。詩人汪国真が何者であるかを問うことは、彼を待望し、歓待し、やがてあっさりと打ち棄てた中国の90年代初頭が如何なる時代であったかを問うことに通じる。忘れられかけた詩人汪国真を今とり上げる意味は、ここにある。

第1章 〈汪国真現象〉序曲

「読者自身が発見した詩人」⁽³⁾と称されるように、国真詩の特徴の一つは若年層の間を先ず手書きで浸透していったことである。暨南大学の中文系に在学し、折々に筆を執って憂さ晴らしをしていた学生国真の詩は、最初のうちはキャンパス内の公報を飾る程度であった。それが少しずつ話題にのぼるようになり、やがて「我微笑着走向生活」が84年10月「年輕人」⁽⁴⁾に掲載されると、次々に「青年文摘」⁽⁵⁾や「青年博覧」⁽⁶⁾に転載された。しかし、胡旦中の「追跡“汪国真熱”」⁽⁷⁾に拠れば、代表作「熱愛生命」は87年当初、詩人自身が投稿した北京の権威ある文学刊行物、次いで四川の某刊行物(胡旦中は文学刊行物が詩歌刊行物であろうと推測している。筆者は前者を「詩刊」、後者を「星星」と推測する。)の何れにも不採用になった。そのために国真は主に青年向けの刊行物に作品を投稿し続けた。やがて「熱愛生命」は北京の雑誌「追求」⁽⁸⁾88年第2期に掲載されると爆発的人気を博し、同年「読者文摘」⁽⁹⁾第10期、「青年文摘」第10期に次々と転載された。このように青年向け

刊行物や文摘類の紙上を借りて、汪国真は徐々に誰もが知る詩人に成長していった。

実は、処女詩集「年輕的潮」の出版は、詩人自身全く予期していないものだった。江迅の「美的征服、始于“手抄本”——“汪国真熱”採訪手記」⁽¹⁰⁾にその出版までのエピソードがある。90年春、一人の女子学生が自分の愛好する詩人の作品を手書きし、書名と序をつけ、「夢幻出版社」出版として一冊の手抄本(すなわち手書き本)を編集した。ある女教師が学生たちが熱心に何かを書き写している様子を目にする。「何を書き写しているの?」「詩です。」「誰の詩?」「汪国真。」「汪国真?(女教師はその名を知らない。)皆さんは彼の詩が好きなの?」「ええ、北京中の学生みんなが大好きです。」この何気ない会話は女教師からその夫に伝えられる。偶然にも彼女の夫孟光是北京学苑出版社編集室主任だった。実際にその手抄本に目を通した孟光はこれを詩集として出版すれば、きっと若者たちの心を惹きつけるにちがいないと確信した。早速上司に建議し、同時にその詩人汪国真を探し出して出版の許可を要請した。そして、90年4月20日に出版社に渡された原稿が同年5月21日にはすでに刊行されている。これは脱稿から出版に至るまでの期間の短さとしては、それまでの中国出版界の新記録だった。こうして一人の少女の純粋で善良で美しい夢が現実となって処女詩集「年輕的潮」が出版された。そして、その夢のような現実が後続の汪国真詩集に引き継がれたのである。また山東省の「濟寧日報」に勤務する若い女性王萍も同様に手抄本を作っていた。その手抄本が「濟寧日報」の李木生の計らいで直接詩人自身の手へ渡る機会を得た。国真は自分の作品が丹念に手書きされ、書名と序まで付けられ、そのうえ内容にも細心の配慮がなされていることに驚嘆し、彼らの依頼に応じて自らの署名を書き加えた。このエピソードを耳にした文化芸術出版社総合編集室主任の許延鈞は、是非ともそれを手抄本の形式のまま出版したいと考え、その目論みは果たして大成功したのだった。この「年輕的潮」は同年10月に広東の花城出版社からも出版され、10万冊を4回刷っている。同様に第二詩集「年輕的思緒」も全て王萍の手書きで同年8月に出版され、14万冊を

3回刷った。この「年輕的思緒」は新聞出版報が報道した90年の10大ベストセラーに文芸書としては唯一選ばれている。次いで第三詩集「年輕的風」も同年10月に花城出版社から出版された。この「年輕的潮」、「年輕的思緒」、「年輕的風」は汪国真の三部詩集である。つい最近まで無名だった新人の詩集となれば、出版社としては慎重になるのが普通であろう。しかし、この汪国真の三部詩集に関しては、出版社は何の条件も付けずに出版を即決した。

汪国真の詩集は、中学生から大学生、または10代から20代の労働者などを対象に飛ぶように売れた。彼らは、いわゆるそれまでの新時期文学の読者とは異なった人々である。例えば91年当時、王府井の新華書店では、通常の詩集の入荷部数が50~100冊だった。それまで一番よく売れた徐志摩⁽¹¹⁾の詩集が2000冊、また国真とほぼ同時期に人気の高かった席慕容⁽¹²⁾の詩集でさえ3000冊であった。ところが国真の詩集は5000冊を入荷し、しかもそれが一ヶ月あまりで完売になるという売れ行きであった。91年5月の上海文化芸術報は、当時、汪国真の作品には執筆中からすでに二、三年後の購入予約まで入っていたと報じている。

こうして汪国真熱（汪国真ブーム）は急速に加熱していった。80年代終盤から90年代初頭の中国詩壇、或いは出版市場といえば、上述の席慕容の人氣が未だ冷めやらぬ時期である。この席、汪の両詩人の詩風は若き愛読者たちによって、その表現方法が平易で庶民的且つブーム的要素を特徴とすることから「熱潮詩」と命名された。⁽¹³⁾このような経緯で、何の変哲もなかった一人の文学青年が、若年層にとっての、いわば教祖的存在に祭り上げられていったのである。

第2章 〈汪国真現象〉

こうした汪国真熱は、やがて文芸の枠を超えて、多方面に渡り90年代初頭の中国全体に影響を及ぼす社会現象に発展していくことになる。〈汪国真現象〉とはその総称である。では以下にその内容を具体的に追ってみる。

国真に関しては詩集だけでなく、詩の解説本、朗読集、カセットテープ、カード、字帖、年賀状、葉書などが次々に商品化され売り出されるようになる。沢山の出版社が色々な形式で一人の詩人を売り出すのは建国後初めてであった。91年当時、北京、陝西、吉林、遼寧、浙江、安徽などの二十あまりの出版社が彼の作品の出版を計画していた。例えば国際文化交流音像出版社は音楽を背景にした詩の朗読カセットを、北京青年音像出版社は彼の歌のテープを出版している。国真詩に曲を付けた「青春時節——汪国真抒情詩歌曲系列之一」は、北京の人気歌手杭宏（当時、21歳）が歌っている。中央電視台、北京人民廣播電視台など

が続々と特別番組を放送した。このようにマスメディアの後押しでその知名度の高まりに拍車がかかったのも特徴の一つである。例えば「熱愛生命」は、発表の二ヶ月後に中央電視台社会教育部の孫慧によって演出され、放送文芸工作団の李曉琦に作曲されて、全国番組司会者賞コンクールのイヴニングパーティーの曲として「路」と改名された。間もなく国真是孫慧との合作でテレビ「服装文化録」の解説の台本を担当するようになった。90年1月19日には中央電視台が詩人汪国真をテーマにした番組を放送した。その番組をきっかけに国真是若年層向けの番組の監督である王洪超とも知り合いになり、その王洪超から91年の五四晩餐会の主題歌を書く要請を受けた。こうして国真是作詞家としての手腕を振るう機会にも恵まれたが、当時の人気ぶりは例えば91年の北京電視台の五四特別番組で選出された新曲30曲のうち六分の一が彼の作詞であったことからわかる。このようにマスメディアが媒体となったことで国真の存在はあまり書物を読まない人々にも知られるようになったのである。

90年10月から12月頃まで国真是北京の各大学の講演会に招かれて、頻繁に自らの詩についての講演を行っている。人民大学、北京外国語学院、北京航空航天大学、北京大学、外交学院など、三十校近くの大学で講演したが、教室はいつも満席になり、講演終了後はサインを求めて聴衆が一時間近くも並んだ。この流れを受けて、91年5月、国真是初めて全国「吟遊」（いわばキャンペーン）に旅立つ。このうち、上海と北京の訪問は、上海市新華書店と北京文化芸術出版社が企画。上海市新華書店の関係者は「文滙書展」での国真詩の大変な売れ行きを見て、彼の詩集は巨大な商業利益があると考えて提案した。5月3日；正午、上海到着。午後は「文化芸術出版社新書発表会並びに汪国真と上海記者懇親会」に参加。夜はインタビューを受ける。4日；大観園と市内を観光。5日；午前中は南京東路の新華書店でサイン会。午後は友人を訪問。夜はインタビューを受け、声像出版社の録音をした。6日；午前中に出版編集者と会談。午後は「汪国真と上海青年懇親会」に出席。夜は華東師範大学に駆けつけ大学生と懇談。7日；午前中、カセットの録音テープを出版するために撮影。正午半に上海より出発。この時期に国真がこなしていた過密日程はこのようなものであった。

ただし国真詩は必ずしも一様に支持されていた訳ではない。例えば91年5月6日、華東師範大学の懇談会場では、「晝紙船の女孩儿」、次いで「給我一个微笑就够了」を朗読する国真に、一人の男子学生が握り拳で激しく机を叩いて、「元々何かの出来事があった時に詠むのが詩なのに、生活の中からこんなに簡単に題材を取るのなら、我々は中文系で一体何をしたらいいのか？彼は我々を侮辱している。」

などと抗議した。この発言をきっかけに、国真に贈る詩を読みあげる者や熱く賛辞を述べる者、憤然と抗議する者や反論する者との激しい議論の応酬となり、会場は騒然となった。この華東師範大学での激論は「汪国真事件」と呼ばれている。「熱潮詩」と呼ばれる国真詩自体にも議論を呼ぶ性格はあるが、大学生があるテーマについて激論を交わすことはそう珍しいことではない。その騒ぎが「事件」と呼称されるようになるまで、詩人汪国真の存在は彼らの中で、もっと広義では中国社会の中で、すでに影響力のある存在となっていたのである。

第3章 汪国真の詩的世界

ではこれから汪国真の主要な作品を見てみよう。

わたしは微笑みながら生活に向かって歩んでゆく

わたしは微笑みながら生活に向かって歩んでゆく
生活がどのようなやり方でわたしに返礼しようとも

平坦さでわたしに答えたでしょうか
わたしは懸命に流れることを喜ぶ小川になろう

困難さでわたしに答えたでしょうか
わたしは厳かに思索する大きな山になろう

幸せでわたしに答えたでしょうか
わたしは空高く天翔るツバメになろう

不幸せでわたしに答えたでしょうか
わたしは何千何万という打撃に耐えることができる強
韌な竹になろう

生活の中に笑い声は欠かせない
笑い声のない世界はきっととても寂しいに違いない

何者もわたしの生活に対する愛情を変えることはでき
ない
わたしは微笑みながら熱く燃える生活に向かって歩ん
でゆく

我微笑着走向生活

我微笑着走向生活／无论生活以什么方式回敬我
报我以平坦吗／我是一条欢迎奔流的小河
报我以崎岖吗／我是一座大山庄严地思索
报我以幸福吗／我是一只凌空飞翔的燕子

报我以不幸吗／我是一根劲竹经得起千击万磨
生活里不能没有笑声／没有笑声的世界该是多么寂寞
什么也改变不了我对生活的热爱／我微笑着走向火热的
生活

84年10月「年轻人」発表。全国的に注目を集めた最初の作品である。文革終結後、80年代を迎えて、人々は新たに覚えた個々人の戸惑いや悩みを何によって解決してよいかわからなかった。殊に若年層は生きる指針を失い右往左往していた。「我微笑着走向生活」は、彼らの日々の生活に指針を示し、生命に息吹を与え、果ては人生の方向付けをした、いや正確には、しようとしたと言うべきかもしれないが、そういう代表的作品である。

いのち
生命を愛す

成功できるかどうかを思い悩む気はしない
遙か彼方を選んだからには
ひたすら夜を日について風雨を顧みず行くだけだ

愛情を勝ち取ることができるかどうかを考える気はしない
薔薇が好きになったからには
勇気をもって真心を告白するだけだ

死後に北風や冷たい雨が襲ってくるかどうかを考える
気はしない
目標が地平線であるからには
この世に残しておくのはただ後ろ姿だけだ

未来が平坦なのかぬかるんでいるのかを考える気はしない
ただ生命を愛しさえすれば
全ては 思ったとおり

热爱生命

我不去想是否能够成功／既然选择了远方／便只顾风雨兼程
我不去想能否赢得爱情／既然钟情于玫瑰／就勇敢地吐露真诚
我不去想身后会不会袭来寒风冷雨／既然目标是地平线／留给世界的只能是背影
我不去想未来是平坦还是泥泞／只要热爱生命／一切 都在意料中

国真詩の中で最も愛好され最も有名になった作品である。この詩が88年「追求」第2期に発表されてから〈汪国真現象〉がいよいよ本格的になった。明るく希望を持って

諦めずに邁進しよう、それも以前とは違って自分自身の為
にである。こういう国真詩の思考は、この時代だったから
こそ通用した一種の思想であったとも言える。

山は高く道は遙かなれど

叫びは爆発した沈黙
沈黙は声無き呼びかけ
激しかろうと
静かであろうと
僕は希う
ただ何もしないことだけはしたくないと

もし遙か彼方が僕を呼ぶならば
遙か彼方に向かって行く
もし大きな山が僕を呼ぶならば
大きな山に向かって行く
二本の脚が破れて血だらけになったなら
いっそのこと夕陽で小道を染めさせてやる
両手が棘で破れただけなら
いっそのこと棘と茨をツツジに変えてやる
脚よりも長い道はない
人間よりもっと高い山はない

山高路远

呼喊は爆発的の沈黙／沈黙は無声の召喚／不论激越／还
是宁静／我祈求／只要不是平淡
如果远方呼唤我／我就走向远方／如果大山召唤我／我
就是走向大山／双脚磨破／干脆再让夕阳涂抹小路／双
手划烂／索性就让荆棘变成杜鹃／没有比脚更长的路／没
有比人更高的山

「叫び」は「激しさ」に、「沈黙」は「静けさ」に繋がる。
そして、例え如何なる状況でも何もしないで自分の殻に閉
じこもっているよりは、兎に角、他人に働きかけていきたく
いと続く。前4行では自己の態度表現について綴っている。
他者とのコミュニケーションを積極的に持とうとする態度
の表明であり、他者への働きかけを奨めている。比喩を用
いた11～14行目を解釈しておこう。険しい行程を歩くうち
に足のマメも潰れ、滴り落ちる血で道が真っ赤に染まる。
両の手で荊を掴んでは前進するので、その荊もツツジのよ
うに真っ赤に染まる。けれど、一向に構いはしない。道が
血で染まったならば夕陽でもっと赤くしたらいい、荊が血
で染まったならば、いっそのことそれをツツジに変えてや
れ、自分はどうあっても先進することを止めはしない、ど
んなに長い道程でも歩き通す、どんなに高い山でも登りき

る、堅固な意志の表明である。この詩も、困難に負けずに
果敢に人生を前進していこうと呼びかける国真詩の思想を
よく表している。

紙の船を折る女の子

彼は大人になって
紙の船を折るのが好きな女の子と
知り合いになった
その女の子は海が好き
海岸の金色の砂浜が好き
黄昏の砂浜をぶらぶら歩きするのが好き
ある日
その子はぶらぶら歩いているうちに
何気なく彼の家に入った
その夜、母親が彼に聞いた
誰か女の子が来ていたんじゃないの
彼は答えた
いや、来てないよ
母親は微笑んだ
じゃあ、その紙の船は誰が折ったの

叠纸船的女孩儿

他长大了／认识了一个／喜欢叠纸船的女孩／那个女孩
喜欢海／喜欢海岸金黄的沙滩／喜欢在黄昏里的沙滩漫
步／有一天／那个女孩漫步／漫进了他家的门口／晚
上、妈妈问他／是不是有个女孩子过来了／他回答说／
没有、没有啊／妈妈一笑／请问、那个纸船是谁叠的

日常生活の中の他愛ない出来事をそのまま綴ったこの詩
は、「汪国真事件」に見られるように賛否の分かれる作品
である。しかし筆者はこの詩を目にした時に、大変な驚き
と新鮮さを感じた。中国でこんなに何気ない題材で書かれ
た詩が公然と市民権を得る時代が来たのか。国家や社会や
共産党のために働きかけることもなく、自分が好きな題材
で書く、あくまで「人間」が中心なのだ。詩句は高尚では
ないがわかり易い、メルヘンティックに詠んだって構わな
い。それまでの中国で、三毛や席慕容など台湾の詩人が補
っていたそういう要素を、汪国真の登場でやっと埋めるこ
とができたのである。

少し微笑んでくれるだけでいい

溢れるほどの想いを僕に寄せないで
君は僕にどんな報いを期待しているんだろう
気持ちの借りは何より重たいんだよ

僕には報いる術もない、かといって忘れてしまうこともできない

少し微笑んでくれるだけでいい
一杯の水っぽい酒のように、一筋のやわらかな風のように
これこそが何より人の心に響く告白なんだよ
まるで春風のように、暖かくて飄々とした

给我一个微笑就够了

不要给我太多情意／让我拿什么还你／感情的债是最重的呵／我无法报答 又怎能忘记
给我一个微笑就够了／如薄酒一杯，像柔风一缕／这就是一篇最动人的宣言呵／仿佛春天 温馨又飘逸

「叠纸船的女孩儿」と同様に、この「给我一个微笑就够了」も、これと言って社会的意義や意識のある詩ではない。だが、前述の理由で、とても人気の高かった作品である。

僕にはわかっています

喜びは人生の宿場
苦しみは生命^{いのち}の航程
僕にはわかっています
あなたが心沈んでいる時の
最もふさわしい贈り物は
穏やかな大空を届けることだと

あなたは途方に暮れているのかもしれないし、
はっきりと答えをだしているのかもしれない
夜の帳がおりる時に
あなたは感じるでしょう
あたたかな眼差しに見つめられていると

僕にはわかっています
あなたが頬の涙を拭う時に
にっこり微笑むにちがいないと
その時、僕はあなたに囁くことができるのです
ほら、ご覧
えんじゅの花が芳しいね、月が清かに輝いているね

我知道

欢乐是人生的驿站／痛苦是生命的航程／我知道／当你心绪沉重的时候／最好的礼物／是送你一片宁静的天空
你会迷惘／也会清醒／当夜幕低落的时候／你会感受到／有一双温暖的眼睛
我知道／当你拭干面颊上的泪水／你会灿然一笑／那

时、我会轻轻对你说／走吧你看／槐花正香 月色正明
独白

性格が明朗だというわけではないのです
実際には、沢山の憂鬱もあるし
沢山の眠れない日々もあって
僕を噛み苛んでいるのです
生命というものは光輝いているだけではないのです

ただ僕は笑うことが好きなだけです
新鮮で明るい雰囲気が好きなので
僕はお茶のようでありたいと願っています
苦しみや渋みは心の中に留め置いて
芳ばしい香りばかりを放つような

独白

不是我性格开朗／其实，我也有许多忧伤／也有许多失眠的日子／吞噬着我／生命从来不是只有辉煌
只是我喜欢笑／喜欢空气新鲜有明亮／我愿意像茶／把苦涩留在心里／散发出来的都是清香

「我知道」と「独白」について述べたい。49年以降、文学を通じてなされてきた「人生の教師の説教」は「闘い・建設・未来の為に・より良い社会主義の為に・祖国の為に」というものであった。ところが、文革の結果、人々はこれらの説教のニセモノ性に気づきその世界観は崩壊した。やがて80年代から90年代を迎え、若年層にとっての人生は廃墟と化してしまった。一個人として人生をどう生きたらよいのか誰も示唆してくれない。折しもそこへ人生などという少し照れくさいテーマについて、臆面もなく語ってみせる風変わりな大人が現れた。その大人がたまたま詩人だった。国真詩には、この時代の若年層のそういう「渴いた部分」を潤す要素があったのだ。彼らは身のまわりの細々したことに対する答えを国真詩の中に求めたのである。

大人にならなければどんなにいいだろう

大人にならなければどんなにいいだろう
鉄の鉤で
月を転がすことができるから
地面にしゃがみこんで
星でおはじきができるから
ベストを脱ぎ捨てて
銀河に遊びに行くことができるから
大人にならなければどんなにいいだろう

例え茶の葉のように芳ばしい友人がいようとも
 例え美酒のように芳醇な恋人がいようとも
 例え野苺のように真っ赤な事業があろうとも
 大人になれば
 悩みがどうしても楽しみよりも多くなるから

人不长大多好

人不长大多好／就可以用铁钩／滚月亮／就可以蹲在地上／弹星星／就可以把背心一甩／逛银河
 人不长大多好／哪怕有茶叶一样香的朋友／哪怕有美酒一样醇的恋人／哪怕有野草莓一样鲜红的事业／人长大了／烦恼总是比快乐多

この作品と解説は「汪国真独白」第2章「童年是一场遊戲」に収められている。幼い頃、父の振世が中央労働部に勤務していたため、国真は母の桂英の送り迎えで労働部幼稚園に通園していた。64年、振世の中等専門学校教育局への転属に伴い、国真も和平里一小から教育局近くの龍路学校分校（現、大木倉小）に転校した。一家はすぐに引っ越しができなかったため、国真は出勤する振世に連れられて登校していた。下校時にバスの定期券を使って道草をする「溜車」が、7歳の国真の一番の楽しみだった。文革が始まり69年に振世が下放されるまで、国真一家の生活は平穏で幸福だった。この作品は「童年是一场遊戲」で「大人になってからの記憶にある幼年時代の楽しかった思い出は大切なものだ。この詩はそんな幼年時代の楽しかった思い出を暇に任せて詠んでみた詩の一つである。幼年時代は遊戯のようだ、遊戯はとても美しい。」と解説されている。

尚、以上の詩は「汪国真的独白」「論汪国真的詩」⁽¹⁴⁾に拠った。

第4章 汪国真詩の評価

これらの作品のどこが若年層の熱狂的な支持を受けることになったのかを考察するために、ここで当時の若年層や評論家の意見を参考にしたい。当時、汪国真については各学校や各大学で朗読会や討論会が盛んに開催され、新聞や雑誌にも沢山の評論が掲載された。本章ではその中から代表的な評論を二つ紹介したい。

まず、肖莹、陸林の評論「热点当中的冷静思考——有関汪国真詩作及其出版熱的座談側記」⁽¹⁵⁾を要約する。この評論は北京大学と北京市第二中学で開かれた座談会での大学生や中高生の発言を参考に書かれている。

- ①国真の詩は全体的に言って、一種の積極的に向上しよう、健康で明るく生きようという前向きな人生観を表

現している。例えば、北京市第二中学の張韞は、国真の詩の中には雕琢もなければ、悲観的な憂鬱もなく、誠実で健全な立派な感情に満ちており、読む者に向上心と責任感を感じさせると言う。同じく第二中学の陳萌は、国真の詩は人生の旅路の困難や悩みも書いているけれども、しかし、悲観、失望はなく、逆に人々に真で善で美的なものを追求するように呼び掛けている。こういう呼び掛けは人々の共鳴を引き起こすと言っている。

- ②国真の詩はわかり易く、極普通の人、取り分け青少年の感情の流れを表現している。北京大学の王少峰は国真の詩を華美な語句がなく文章の構成が割と綿密で言葉が通俗的でわかり易いと言っている。更に北京市第二中学の張韞はこう語る。国真の詩は小川のように清く透き通っていて川底が見えるようだ。浅いことで却って澄み渡るように、平易だけれどもそれが却って意味をはっきりさせている。また緑茶のように、薄いけれどもそれが却って芳香を漂わせている。これは中学生の読書に非常にふさわしい特徴である。
- ③国真の詩は雅文化の形式で出現した俗文学である。極普通の読者の芸術鑑賞能力に一定程度適している。つまり、朦朧詩のような高級な文学と違って普通の生活感覚、感情を表現している。だから大多数のありふれた読者、つまり、青少年の鑑賞に適している。それ故に歓迎されるのである。北京大学の王海凌は国真の詩は一種の市民階層の文化を代表していると言っている。
- ④国真の詩は思想的に深みに欠けているという北京大学の侯紅蕊のような意見もある。国真詩の題材は非常に狭く、内容も比較的浅い。花鳥風月でなければ青春とか夢とかで、あまりにも単純すぎる。生活の深みから練り出された人に深くものを考えさせるようなものではない。

次に、曲聖文の評論「汪国真現象——青春期的閱讀期待」⁽¹⁶⁾の要点をまとめたい。汪国真の詩を歓迎するような青年心理的な理由として、13、14歳～27、28歳までの青少年、青年期の人間の特徴として次のような点を挙げている。

- ①幻想を好み失望しやすい。
 ②衝動的ですぐ意気消沈する。
 ③友情を重んじ騙されやすい。
 ④人生経験が浅く、そのために知識欲が強い。
 ⑤社会経験が少なく、何かやってやろう、何かをしようという意気込みが強い。

これらの特徴から、この時期の青少年にふさわしい書物は次のようなものであるとする。

- (a) 知識欲を満たすもの、つまり色々な専門知識

に関するもの；自然科学、社会科学、生活知識、文化娯楽など。

(b) 感情体験を満たすもの；具体的には感情生活を表現する様々の文学作品。

(c) 人生経験を表現したもの；具体的には人生経験を述べた小説や伝記文学。

ところが、国真詩以前の当代文学には、これらの要求を満たす作品が出現していなかったため、香港や台湾の作家がそれらを補っていた。85、86年ないし87年にかけて、愛情小説の琼瑶⁽¹⁷⁾、三毛⁽¹⁸⁾、席慕蓉、岑凱倫⁽¹⁹⁾や武侠小説の金庸⁽²⁰⁾が流行したのは、中国の作家がそれを満足させるような作品を書いていなかったからである。小説家の中にはそれらを描く作家が多少いたが、詩人の中には全然いなかった。国真詩はその要求を満たすものだったというのである。

具体的には、

① 事業や前途に対する追求；「熱愛生命」や「山高路遠」などに見られるように、目的を達しなければ絶対に休まない、時代の要求に答え、事業に献身する豪情な気持ちを描いている。

② 人生道徳；一種の物事に超然とする人生態度、楽観的な態度を述べている。

③ 恋愛；どちらかといえば失恋の詩が多い。「恋愛は我々を楽しくするが、失恋は我々を深刻にする・・・笑うのもいいし、泣くのも悪くない」という国真は人生に対する一種の達観を表現している。

④ その他；別れと関係ある切々たる思い、事業や物事に対する追求と関係のある信念などを描いている。また、現代の生活のやり方や息吹についても書いている。

要するに、国真詩は、若年層の日常の喜びや悩み、成功や失敗に対して感情に満ちた注釈と回答を与えている。そのことによって成功者には有頂天にならないように落ち着きを、落伍者にはもう一度向上しようとする意欲を、失意の者には慰めを得させているのである。

以上が当時の新聞や雑誌に広く伝えられた主な見解である。これらについては筆者も同意見である。最後に筆者は中国の評論家たちが言っていないこと、つまり、新時期文学の中での〈汪国真現象〉について私見を述べて本稿を終えたいと思う。

第5章 新時期文学の中での〈汪国真現象〉について

1. 1990年代初頭の中国社会と新時期文学の潮流について

1990年代初頭の新しい時期文学を論じるにあたって、まず中国にとっての「1989年」について検証しなければならない

と思う。中華人民共和国成立から40周年、改革開放政策を打ち出してから10年が経過していた当時の中国は様々な矛盾を抱えていた。地域格差、階層的な格差は拡大し、また開放政策とテレビの普及によって海外の事情に対する認識もより現実に近いものになっていた。政治を民主化するならばもっと経済も発展し、豊かな生活がおとずれると信じられ、ブルジョア自由化は四つの基本原則と勝ったり負けたりやの攻防戦を繰り返していった。その民主化運動が高まりを見せ、89年にはついに第2次天安門事件が発生する。ここではその経緯と評価については詳述しないが、村上宏は「中国「内陸」発 — 底辺から見た「中華世界」の真実 —」⁽²¹⁾で「中国は二十世紀の終わりになるまで安定した国民国家をつくる事業に失敗した。中国では誰もが「国家」「制度」を信じない。数年もしないうちに変容してしまうからだ。」と述べている。自分たちの民主化の要求を「動乱」とみなされ党による武力弾圧を受けた民衆、殊に若年層はこの天安門事件以降生きる方向を見失っていた。国真が登場した90年代初頭は丁度その時期に合致する。仮に北島の「回答」に代表される朦朧詩人⁽²²⁾が89年天安門事件までの民主化の意識を誘導したと言うならば、汪国真は民主化運動鎮圧後の彷徨える若者たちに生きる指針を示したと言える。そしてここに〈汪国真現象〉が生じた一つの理由が認められる。

また、中国では90年から株式市場が始まり、92年2月28日付の中共中央第二号文書で下達された鄧小平の南巡講話は、高まりつつあった左傾思潮を一掃し改革開放路線を決定づけた。同年6月9日に江沢民総書記は中央党学校の省・部クラスの班学習で重要な演説を行い、鄧小平の南巡講話の精神の実行こそ中央と地方の重要な任務であるとし、計画経済体制から市場経済体制へ移行することを強調した。この演説から新しい経済体制は社会主義市場経済と呼ばれるようになった。そこで文学に話を戻すと、この市場経済の導入によって文学は消費化、商品化され、それまでの新時期文学は変貌を遂げた。王紀人の「新時期文学的終結」⁽²³⁾に代表されるように、生活様式も価値観も多元化した中国社会の中で、もはや新時期文学は終焉し新たに后（ポスト）新時期⁽²⁴⁾に突入したと提起する声が次々に上がった。小説でいえば80年代終盤から起こった新写実主義や先鋒、新状態といった文学が后新時期文学に数えられる。王紀人が言うように、そもそも新時期文学を貫徹する文学精神は、国家の運命に対する関心、人間の尊厳と価値の尊重、社会改革とイデオロギー改革への参加意識、芸術上の探索精神、といったものであり、この文学精神を体現した作品が、反思（反省）、啓蒙、探索という新時期文学の特徴を形成していた。80年代の新時期文学は正にこの憂慮意識を背景に成立していたと言えるのである。しかし文学はその使命感や責任感によって政治に関与したために逆に政治からの干

渉を招き圧力を受ける結果となる。加えて西洋の文芸思想の流入でその観念自体にも変化が生じた。そして現実を回避することを余儀なくされた文学からは憂慮意識が消滅していくことになる。また、新時期文学は社会性や政治の「大きな物語」には注目したが、その中で、一人一人の個人がどう生活すべきかという具体的な「小さな物語」はほとんど無視していた。やがて90年代になって国家、社会、民族への関心は薄れ、個々人の生き方に人々の関心が向くようになった。例えば新写実主義の代表とされる劉震雲の「地面いちめんの鶏の毛」⁽²⁵⁾のように、商品経済下で大志や理想などを持たなくなった中国人の生活にスポットを当てた作品も現れたが、それらの作品は普通の生活者が何を考え、どう生きているかを日常生活の瑣事の描写から浮かび上がらせようと試みるもので、読者に生きる指針を与える要素は含まれていなかった。そういう文学的風潮の中で、第4章の曲聖文の評論中(a)(b)(c)で確認したような要求を満たす作品は出てこなくなっていた。汪国真の登場はその文学的土壌と無縁ではない。国真はまだ理想や信念を持ち、未だ人生の挫折を経験していない若年層の心理に働きかけた。だからこそ新たな社会の中で生きる指針を模索し何処かで見つけること、或いは誰かに答えてもらうことを渴望していた若年層から熱狂的に支持されたのである。いわば新時期文学を終わらせた文学的な根拠こそが詩人汪国真を生みだした根拠になったのである。新時期文学或いは中国文学全体との関連で見れば、汪国真はそれらが無視してきた部分に光を当て、それまでの文学の欠落を補ったと言える。そして益々複雑且つ合理的に変質している中国社会だからこそ、実は、文学は汪国真によって光を当てられたような要素を忘れずに包括していかなければならないのではないだろうか。

2. 新時期文学の詩潮流における国真詩について

76年10月の「四人組」失脚後、文革期の中国詩壇を構成していた多く非職業的な工農兵詩人(労働者、解放軍兵士、下放した知識青年や農民など)や、一部の文革に同伴した職業詩人は文壇から退場することになった。やがて78年の平反(名誉回復)によって文壇に生還した詩人たちは、当時30代後半から40代半ばで、青年期を新中国建国初期に過ごし、その後反右派闘争(57年)、文化大革命(66-76年)といった混乱期を経てきた人々である。彼らが10年あるいは20年余りの沈黙を破って最初に声高らかに唱えたのは、苦難の日々や生還の喜び、そして新しい中国共産党や中国の未来に対する期待であった。そのほぼ同時期に現代詩の新詩潮として朦朧詩と総称される象徴詩を書く青年詩人たちが登場する。彼らは文革後の中国現代詩の最も前衛的な一面を切り開き実質的にリードしてきた。79年以来詩壇では「難解、晦渋で朦朧としていて何を言いたいのか解らな

い」と評されるその詩潮の是非をめぐる朦朧詩論争が繰り広げられていたが、重ねて83-84年に行われた精神汚染キャンペーンで彼らは沈黙を強いられることになった。やがて85年に朦朧詩論争が終結し朦朧詩人たちは全面的に詩壇の承認を得て発言を再開した。しかし、ほぼ時を同じくして朦朧詩の盛行に対する反動を掲げて更に若年の詩人たち(多くは当時、二十歳過ぎ)が登場した。文革期に生まれ幼少年期を文革期に過ごしたその詩人たちは第三代詩人(中国語では第三代人。或いは新生代、后崛起的詩人。)⁽²⁶⁾と称され、86年になって一気に詩界の注目を惹くようになった。中央、地方を問わず「中国」「詩刊」「詩歌報」「星星」「草原」などの文学雑誌はこぞって彼らの詩を掲載した。第三代詩人は主張内容から非非主義、整体主義、奔漢主義などいくつものグループに分類されるが、分類の内容はここでは詳述を避けたい。例えば非非主義の主要メンバーの周倫佑は1952年生まれ(86年のグループ成立当時34歳)、藍馬は1957年生まれ(当時29歳)である。「我微笑着走向生活」が84年10月「年輕人」に掲載され徐々に話題に上りだした時、1956年生まれの汪国真は28歳だった。つまり国真は第三代詩人と同世代で、且つほぼ同時期に若年層の読者の注目を集めたのである。国真詩は文体は華麗さに欠け、また思想的にも深さに欠ける。ところが90年代になって爆発的な人気を誇り世間の話題をさらったのは国真詩だった。難解で一般の読者には何を言いたいのかわからない朦朧詩や先鋒性は認められるが詩的主張とその実践であるべき実作品の間かなりの距離が目立つ第三代詩人の作品に較べ、国真詩は兎に角平易な表現を用いて、恋愛や友情や人生や思想や修養などについて率直に語りかけ、当時の若年層の心に溶け込み易かったのである。マスメディアの打った宣伝が彼を流行り者的存在にしたせいも、当初は彼の存在は既成詩壇から無視されていたが、87年から94年にかけて「詩刊」も彼の作品をいくつか掲載している。⁽²⁷⁾

3. 市場経済の賜物としての〈汪国真現象〉

90年代の中国では市場経済が文学や芸術にも介入するようになり、それらさえ消費化、商品化されるようになった。文学でいえば売れるものは出版され、売れないものは相手にされない。そういう状況にあって、手書きで浸透していた国真詩の中に商品としての価値を見出した出版資本が国真詩をより良く売れる商品として出版市場に売り出した。これが〈汪国真現象〉のもう一つの側面である。

92年から社会主義市場経済が遂行され、中国は社会主義から実質的な資本主義に移行する。万言書⁽²⁸⁾は「1992年以降、主な宣伝、世論分野で、ブルジョア自由化を批判する文章は基本的になくなり、ブルジョア自由化が再燃しているばかりか、より激しさを加え、深さも幅も天安門事件以前をはるかに超えている。「社会主義か資本主義か

を問わない」「すべて金のため」という思想に導かれて、横領、賄賂強要、贈賄、収賄、密輸、麻薬販売、詐欺、ポルノ、売春などが堤防の決壊したようにあふれだし、腐敗は第二の新しい段階に達した」と述べている。それまでの倫理、観念、行動様式が役立たなくなった社会では、もはや汪国真風の理想は打ち砕かれ意味を持たなくなってしまった。国真自身が多様化する社会にあって、読者に応えるものが書けなくなり、出版市場も旧態然として商品価値を失った詩人を見捨てたのである。市場経済の中で変質してしまった90年代の若年層は以前のように国真詩を手書きするような純粋さを持たなくなっている。つまり、詩人汪国真を創造したのも抹殺したのも改革開放なのである。このように文学の消長が経済的な動機、つまり雑誌やジャーナリズムの意向で決まってしまうというのが后新时期文学の特色の一つである。汪国真の辿った運命も正にこれによって左右されたものであった。そしてこの特色は、今後の中国文学を考えるときの注意点でもある。これに絡んで、特に純文学の行方に警鐘を鳴らす者は多い。

4. 〈汪国真現象〉の意味について

このように90年代の中国文学は、文革後の改革開放政策の中で社会主義の一元的文化が崩壊し、社会主義リアリズム一点張りでない多元的な価値観の中で育まれた。換言すれば、社会主義思想がカバーできなかった部分を補う様々な思潮が出現した。つまり読者が自分の好みに応じ公然と自分の読みたいものを読めるといった状況が生まれたのである。国真詩は、社会主義とは関係のない地点で人生や恋愛や青春を考えることを欲した若年層の要求に応え得る対象として受け入れられたのだ。しかしそれだけが支持された理由ではない。それまでの中国文学が基本にしていた毛沢東の文芸講話の第一要求は「文芸は政治に服務する」という強い政治性であったが、80年代には文芸講話の要求に応じた文学作品は何の力も持たなくなっていた。人々の関心が政治ではなく経済や自分の身のまわりのことに移ったからだ。政治的色彩が欠落している国真詩は、却って若年層には魅力となったのである。また、文芸講話は「人間の「階級性」を重視し、「人間」を普通に生きる存在としてではなく「闘争の人」と見なしている。そこで文学は人間が如何に社会主義建設や革命のために闘うべきかについては書いてきたが、普通の状況で人間がどう生きるべきかについては述べてこなかった。やがて三信危機⁽²⁹⁾で問題になったように、80年代後半には人間は如何に生きるべきかに答える者はいないという状況がおとずれた。誰もこの問いに答える者がおらず、共産党の理論も、社会も、父母も、既成の文学もこれに答えていない、答えようとしていないという状況が出現したのだ。国真詩は「人生の基本、人いかに生きべきかという根底にあるもの」という命題

に誰も答える者がいない中でその役割を担ったのである。それこそが彼の詩が若年層の心を引きつけた最大の理由である。同時にそれが国真詩と〈汪国真現象〉の意義なのである。

注

(1) 以下は、主に「汪国真独白」(汪国真・巴丹著 1991・6 国際文化出版公司)を参考にした。

1956年、北京生まれ。原籍は福建廈門の後溪郷英村社。父の王振世、母の李桂英、一つ違いの妹の四人家族である。振世は廈門大学教育系卒の知識分子。90年当時は北京の中等専門学校教育局に勤務していた。桂英は初級中学までの教育だったが子供たちには高等教育を受けさせたいと考えていた。詩人汪国真のルーツを辿ればこの両親の教育方針に帰するところが大きい。振世は9歳になった国真に「三国志」を読み聞かせ、先ず読書の楽しさに触れさせた。両親の願い通り、国真は「水滸伝」や「西遊記」、「紅樓夢」などの古典文学や、当時人気があった「烈火金剛」や「野火春風斗古城」などの書物をすすんで手に取るようになった。68年に「毒草」として禁じられた文学のうち、「赤と黒」や「アンナ・カレーナ」などいくつかの作品を禁止以前に読むことができた。

やがて文革が次第に国真の家庭や進路に陰りを落とすようになる。69年に父振世が安徽省鳳陽の五七干校に下放され、78年に北京の教育部に復職するまで一家は離れて暮らした。更に親戚に海外在住者が多い「海外関係」にある国真の家族はスパイ容疑をかけられ批判の対象にされた。その影響で、71年に北京実験中学を卒業したが、高級中学への進学が許されずに北京第三光学測量工場に就職し、工具として7年間を労働に費やした。77年の入試制度の改定後、大学の受験資格を得る。当初は理工系学部を目指していたが最初の受験に失敗して文科系に転向した。翌78年、暨南大学中文系合格、22歳。彼は幼い頃から一途に軍人になることを夢みていたが20歳でその夢を捨てている。その理由を知る手がかりはないが、文革の経験が影響しているのかもしれない。

国真は大学生になってから文筆活動をはじめているが、その明確な動機についても手元の資料からは見えてこない。暨南大学在学中の79年4月12日発行「中国青年報」(中国共産主義青年団機関誌。青年向けの全国誌。51年4月27日創刊。66年8月停刊。78年10月復刊。所在地は北京市海運倉2号。)に初めて作品が掲載された。全国誌掲載は初めてだった。掲載後、国真は編集部から梁平より手紙を受け取り、暨南大学校報に載った詩が選抜されて「中国青年報」に転載されたという経緯を知った。詩人汪国真の名は少しずつ知られるようになっていったが大学在学中はあまり有名ではなかった。82年大学卒業後、中国芸術研究院(78年に文化部の直属機関として設立。主として戯曲、音楽、美術、映画、舞踊や外国の文学芸術の理論と現状を研究している。)に配属され、「中国文芸年鑑」編集部の副主任に就任した。〈汪国真現象〉が起こった当時もここに勤務していた。尚、「中国文芸年鑑」は82年9月に第1巻が文化芸術出版社(北京前海街17号)より刊行された。管見の範囲では汪国真の名は第3巻に見える。

(2) 胡旦中「追踪“汪国真熱”」(「文化熱點大反思 汪国真現象 備忘録」袁幼鳴・李小非編 学林出版社92年10月出版)より。

(3) (2)と同じ。

(4) 共青团湖南省発行の月刊誌。1981年7月創刊。36頁、定価0.20元。定期購読部数21万部。

(5) 中国青年出版社出版(在北京)。1981年に不定期刊行物とし

- て創刊。82年に隔月刊。83年から月刊誌になる。
- (6) 共産主義青年団福建省委員会の主編。福建青年雑誌社発行。1985年1月「青年報刊選摘」として創刊。85年5月「海内外青年文摘」に改名。86年1月から「青年博覧」となり月刊誌として刊行。
- (7) (2)に同じ。
- (8) 中国青年出版社出版。1986年1月創刊。隔月刊。
- (9) 甘肅人民出版社（蘭州市）刊。1981年3月創刊。当初隔月刊だったが82年からは月刊。定価0.6元。
- (10) (2)に同じ。
- (11) 1897～31年 詩人で散文家。新月派の代表詩人で抒情詩を多く書く。飛行機事故で死亡。
- (12) 1943年～。台湾の女流詩人で散文家。81年出版の第一詩集「七里香」は86年までに35版刷られる。85年には台湾のベストセラーランキングで上位を占め「席慕容年」と称された。
- (13) 91年5月に中山大學、華南大學、暨南大學、中山醫科大學の学生数十名が華燕ホテルで開催した座談会上で命名された。「熱潮」は「急激な高まり、高揚、ブーム」の意味。
- (14) 「論国真的詩」雪若・夢谷編選1991・7 青海人民出版社 出版
- (15) 「文化熱點大反思 汪国真現象 備忘録」所収。
- (16) 「年輕的詩与思 汪国真」(大連市聯文研究室輯 1991 延辺大學出版社)に所収。
- (17) 1938年～。台湾の女流小説家。台湾の愛情小説の集大成者と称される。
- (18) 1943～91年 台湾の女流散文家。病氣入院中自殺。中国大陸でも当代文学の著名作家に数えられる。
- (19) 生年不詳。香港の小説家。女性。香港屈指の人気作家の一人に数えられる。
- (20) 1924年～。香港の小説家。武俠小説を多く書く。最近、翻訳がでた。
- (21) 日本經濟新聞社99年出版。
- (22) 北島、顧城、黄銳、白日、食指、舒婷など22名あまりの、文革後から新しく登場した、独自の表現方法で詩を書く一群の詩人を指す。登場当時、ほとんどが20代の青年であった。彼らが刊行した「今天」(ガリ版刷りの非公認出版物、いわゆる「民刊」)は、78年12月から80年9月までの2年足らずで全9冊に過ぎないが、文革後の中国現代詩の最も前衛的な一面を切り開いたと言ってよい。
- (23) 「文論報」(93・6・12)。作者の王紀人は「上海文学」編集長。
- (24) 「文芸報」38期(92・9・26)で初めて「后(ポスト)新時期文学」という表現が用いられ、93年から賛否両論が文学ジャーナリズムを賑わせた。78年から推進された改革開放が新時期文学という新しい文学を生んだが、やがて改革開放の深化がそれを変質させ、終焉させることになり、90年代に入って、その流れを汲んで新たに后新時期文学が登場したと提起された。新写実主義小説、新市井小説、新歴史小説、新改革小説などがそれに含まれる。
- (25) 著作者は劉震雲(1958、或いは60年生まれ 男性 河南省出身)。「小説家」91年1期発表。「小説月報」91年1期、「中篇小説選刊」91年2期、「新華文摘」91年5期、「作品争鳴」96年6期に再録。「中国現代小説」91年夏・22号に日本語訳掲載。北京の官庁に勤める若い夫婦のもの語り。大学時代は大きな理想を抱いて努力していた二人がいつしか「大志だと、人生の大理想だと、糞つたれ、それは若かったときのことだ。俺も適当に暮らしている、それだって人生じゃないか。」と考える人間に変わっていく。勤務先と家を往復し、飯を食い、眠り、洗濯し、お手伝いとやり合い、子供の世話をする、そんな日常生活の瑣事を綴った新写実主義の代表的小説。他に池莉の「煩惱人生」(上海文学87・8)、「太陽出世」(「鐘山」90・4)、「冷也好熱也好活着就好」(「小説林」91・1)や、方方の「風景」(「当代作家」87・5)、「落日」(「鐘山」90・6)、劉震雲の「單位」(「北京文学」89・2)、王安憶の「叔叔的故事」(「收穫」90・6)などがある。
- (26) 洪子誠・劉登翰著「中国当代新詩史」(人民文学出版社94年出版)中の「新詩潮的“新生代”」、岩佐昌暲の「朦朧詩以後の中国現代詩」(季刊「中国研究」87年8号)に詳しい。
- (27) 87年10月号、表紙裏に程亜杰の油絵「心曲」と共に国真の詩が使われたのが最初。次いで88年12月号(1首)90年2月号(3首)、同年12月号(7首)、92年10月号(5首)、94年3月号(2首)に見られる。
- (28) 本来の題目は「わが国の安全に影響を与える若干の要素」という。94年から95年をはじめにかけて書かれた。署名はなく、筆者は今だに不明。95年春に「口コミ」或いは「手書き本」の流通ルートを利用して北京の町に広く散布され、さらに他の地方に流れていった。その文書は次の点を全面的に証明しようとしている。「改革開放は中国に新しいブルジョア階級及びブルジョア階級のイデオロギーを作り出し、しかも共産党内部の悪者と気脈を通じ、国家の安全に重大な脅威を与えている。その脅威は1992年以降、日増しに増え、ひどくなり、いまや全面的勢いを振るうに至っている。」北京ではこの文書を「万言書」と呼ぶ。「交鋒」(馬立誠・凌志軍著 伏見茂訳 中央公論新社99年出版)参考。
- (29) 三つの信仰の危機。①社会主義はよいのか悪いのか。②党の指導の必要はないのか否か。③マルクス・レーニン主義、毛沢東思想は活力があるのかないのか。この三つについて確信が持てないことを指す。「信念の危機」という言葉が中国のマスコミに初めて登場したのは1980年1月である。郭羅基「いわゆる〈信念の危機〉を評す」(上海「文匯報」80・1・13)によれば「一部の人はマルクス・レーニン主義がダメになったと考えており、学習しながらない。学校では政治理論科は歓迎されない。機関や工場での政治理論学習はひまつぶしになっている。一部の人はマルクス・レーニン主義に対する信念が動揺しており、信用せず、学習しない。これがいわゆる〈信念の危機〉である。」「二〇〇〇の中国」(矢吹晋著 論創社1984年7月出版)に詳しい。